パラ準備、綱渡りの加速

首相「五輪、責任果たせた」

東京五輪の閉会式から一夜明け、国立競技場で作業する人たち＝９日午後

東京パラ あと14日

東京五輪の開閉会式について、大会組織委員会は９日、コスト削減や簡素化、新型コロナウイルス対策の観点から、起用したパフォーマーの人数が当初の想定の約４分の１となったことを明らかにした。開会式ではフィールドを覆うため800人程度の起用を見込んでいたが、約200人にとどめざるを得なかったという。

式典を巡っては、地味だったとの指摘が相次いでいる。記者会見した振り付け担当の平原慎太郎氏は「大人数を使ってスペクタクルにやりたかったが、かなわなかったというのが実感。式典を守り、最小限の人数でどういうことができるかを考えた」と語った。

五輪開閉会式 演者、想定の４分の１

緊急事態宣言などを受け、リハーサルが１カ月ほどできなかった時期もあった。映像による演出が多かったのはこうした事情が背景にあり、エグゼクティププロデューサーの日置貴之氏は「どういう状況であっても一定量のコンテンツを確保しなければならなかった」と述べた。

大会の１年延期により、式典の内容は大幅に見直され、３月には統括役の佐々木宏氏が辞任した。８日の閉会式に関し、日置氏は「３月以降、ほぼ完全につくり直した」と明らかにした。

東京五輪の閉会式で降ろされた五輪旗（左下）＝８日、国立競技場

東京五輪が閉幕し、大会組織委員会は24日開幕のパラリンピックの準備を加速させる。組織委の武藤敏郎事務総長は９日、パラの新型コロナウイルス感染症対策について「アスリートの中には基礎疾患のある人や介護者が付いている人もいる。きめ細かな対応と五輪とは違った配慮が必要だ」との考えを東京都内で記者団に示した。コロナ対策の強化や観客の扱いが課題になる。

（５面に関連記事）

菅義偉首相は９日、長崎市で記者会見し、東京五輪について「開催国としての責任を果たせた。国民に感謝したい」と述べた。

武藤氏はパラの観客対応を巡り、会場のある自治体、政府、国際パラリンピック委員会（IPC）などと協議して、早期に結論を出す考えを表明。会場がある自治体の児童や生徒を対象とした「学校連携観戦プログラム」で、子どもたちの観戦機会を確保する案については「パラは五輪とは違う教育的意味合いがあるが、感染が収まらない中で難しい判断になる」と述べるにとどめた。

五輪について「パンデミック（世界的大流行）の中で世界規模のイベントが開催可能だとの事実を示した。そのこと自体が語り継がれるレガシー（遺産）になる」と強調した。１年延期決定後も中止を前提に検討したことはないと説明。「観客を入れるべきだとの意見もかなりあったが、無観客は結果として正しい判断だったと思う」と振り返った。

組織委によると、五輪では海外から選手や大会関係者ら約４万３千人が来日し、８日までに約２万４千人が帰国した。９日に約１万人、10日に約４千人が出国する見通しという。

五輪関係28人陽性

東京五輪・パラリンピック組織委員会は９日、大会関連で28人が新たに新型コロナウイルス検査で陽性になったと発表した。選手の新規陽性者は４日続けてゼロだった。

大会関連の陽性者は７月１日以降で、累計464人になった。このうち選手村滞在者は34人。

陽性者のうち、国内在住者は307人、海外在住者は157人。海外からの大会関連の入国者は７日までに４万２千人超となっていた。

東京パラリンピック開幕までの流れ

- 10日以降：政府、東京都、大会組織委員会、IPCなどの代表による５者協議で観客対応を判断へ
- 12日：競技開催４都県以外で聖火採火がスタート
- 17日：聖火リレー開始。日本選手団結団式
- 20～23日？：未確定選手を対象に障害クラス分け審査を実施
- 24日：国立競技場で開会式が行われ、第16回夏季パラリンピックが開幕

若い世代、冷静な視線

新型コロナウイルス下の開催、掲げられた理念―。社会問題に取り組む若者は、東京五輪で何を感じたのか。「五輪と選挙は別」「真の多様性を」。同年代の選手たちも活躍したが、熱狂からは一歩引いて、冷静に先を見つめる。

若い世代の政治参加を目指す団体「NO YOUTH NO JAPAN」代表で慶応大学院生の能條桃子さん（23）は、熱心にテレビ観戦する家族を横目に心から楽しめなかった。自身はワクチン接種を終えたが、希望しても打てない知人は多い。「高齢者が接種したから五輪はやる。若者の命は重視していない、と言われたように感じた」と話す。

秋には衆院選が控える。コロナ禍で政治を「自分事」に感じるようになった若者は多く、「五輪が盛り上がったから政権を支持するとか、そんなにばかじゃない」と指摘した。

コロナ禍の五輪に意義を見いだせず、周囲と競技の話題で盛り上がることもなかったというのは、性的少数者への理解を進める一橋大の学生団体代表で、大学院博士課程に在籍する本田恒平さん（26）。ただ「皮肉にも開催のおかげ」と感じたことがあるという。

それは女性蔑視発言や過去のいじめなど大会関係者の「人権に対する意識の低さ」が明らかになり、日本社会が危機感を持てたこと。「多様性と調和を掲げたが、薄っぺらで中身が伴わず、ぼろが出た。これではだめだ、と皆が気付けたのは良かった」

期間中、会員制交流サイト（SNS）で、東京五輪に出場したトランスジェンダーの選手に対する誹謗中傷も目にした。「性的少数者への理解は広まりつつあるが、まだまだ差別的な言動も目立つ。日本を真に多様性を尊重する社会に変えられたら」と語った。

■全国から応援の警察官帰任へ

東京五輪閉幕から一夜明けた９日、都内の大会警備を担うため全国の警察から特別派遣部隊として応援に入った警察官の「雛(ひな)型式」が警視庁で開かれ、斉藤実警視総監は「酷暑の中、みなさんの真摯（しんし）な勤務ぶりに『都民から称賛の声が多く寄せられた』と謝辞を述べた。

部隊はそれぞれの地元警察に帰任するが、一部は24日開幕のパラリンピックでも再派遣される。

式には31府県警の代表者ら約60人が出席。斉藤総監は「オールジャパンで歴史に残る祭典の警備を完遂できたことは、警視庁にとっても大きな誇りだ」とし「（新型コロナウイルス感染防止のため）一定の行動制約にもご理解いただき、おれ申し上げる」と話した。

京都新聞社 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

©京都新聞社 無断複製・転載を禁じます